



現代ロシ...

ゴルバチョフの改革の話。俺たちが生まれた頃の話。

今までの話。政治の伝統、メカニズムを話してきて、これから俺たちが生まれた頃の話に至るわけ。これからが山場ね。歴史の授業ではないのでただの事件の羅列はしないで注意。ペレストロイカの概要を話す。そして、政治体制の機能とは何か、民主化とは何か、という話が今日は重要です。

簡単に言うと、ゴルバチョフの改革が始まる以前に、つまり1985.3—1991

年、これがゴルバチョフが就任していた時期なのだが、そのうち就任した時期

1985.3 くらいの時期に何が起こっていたかということを考える。それが政治体制の機能とは何かを考えるということになる。ソ連体制は、ゴルバチョフが権力を握った時点で、この当時は非常に情勢は安定していたといわざるを得ない。革命や、内線の動乱、1930年代の上からの革命、などいろいろな問題はあったものの、戦後のソ連というのは非常に安定していた。抗議運動や批判の運動はとかはあったにしても規模が小さく、政治基盤を揺るがすほどではなかった。北朝鮮も安定していて機能し続けているのは確か。問題なのは体制が機能しているということが必ずしも時代が要求する課題に答えているのかどうかということである。そして、答えられていないとなるとどうなるのか。体制は非常に安定していても、軍事競争・経済競争・社会改革の遅れなどに現れ、落ち込んでゆく。そうになると、経済成長がストップ、生産能力が落ちる、国民全体が外国に逃げようになる、という事態になる。あるいは、緊張関係にある場合は自国の独立が脅かされるという事態になるということがある。政治体制というのは、現在の課題に答えているのか、将来の課題に答えているのかということを考えずには語れないということだ。

軍事的な対抗関係でいえば、米ソ関係ではソ連は負けているという印象はなかった。アメリカも、東ヨーロッパで何か問題が起こっていても、そこに手を出すのは危ぶまれたので、何もできなかった。しかし、1970年代から明らかにソ連の経済成長が鈍くなっていった。そして「イデオロギーの挑戦」という問題が起きてきた。今でいうとソフトパワーが落ちてきたということ。つまり相手国に対して自分の文化的な魅力がなくなってきた、思想的な魅力もね。社会主義が、革命の最初の段階では非常に魅力的であったのだが、魅力がなくなったため、多くの国のインテリの夢を膨らませることができなくなっていった。ソ連国内でも、自分たちの掲げるイデオロギーがその通り実現しているなんていうやつは少なくなっていた。そんなときにゴルバチョフが就任しペレストロイカが始まった。

ただ、なぜこの指導者は改革を初めて、他の指導者は改革を始めなかったのかを、合理的に考えなければならない。日本でいえば、どのレベルから改革が始まったのかとか、いつを境に誰がどうして改革を始めるのかということを考えることは大事である。ソ連では、確かに経済成長率が落ちていたにしても、マイナスにはなっていなかった。5年計画が始まって以降、成長率は下がっていたにしても、成長はし続けていた。民族の反乱や、エスニックな反乱があったというのは嘘であるから注意。問題は、第一に、国際的には第二次冷戦が強まっていて、1980年にアメリカではレーガン大統領が選出され対決姿勢の対外路線をとろうとして、緊張関係が高まってゆき、ますます軍事的な対立が起こるということが目に見えていたこと。第二に、1981年から急激に石油の価格が下落していったことである。石油価格は1970年代にオイルショックで石油価格が高騰した。産油国であったソ連は非常に潤った。でも、石油って非常に不安定だから、1981年から急激に石油の価格が下落していった。その結果、石油を売って、そのお金で機械製品を、穀物を買うという状態になっていたソ連経済は大打撃を受けた。対外的には緊張レベルが高まる。内面的には、国際的に外貨を稼ぐことができなくなった。別の製品によって外貨を稼げるような構造にはなっていなかったから、当然大打撃を受けた。成長は伸びなくなるわけ。

そんなときにゴルバチョフが就任した。54歳という若さ。前期書記長と20年も差があるということに着目すべきである。正確には17年間。これが何を意味するか。若いということは、大胆であり、それは経験が不足しているということである。そういうやつは、自分が改革をしなければと考えるのは当然のことである。自分ができることとできないことの区別がつかない可能性があった。自分なら改革ができるという自信と経験の不足があった。結果から見れば、非常に自信過剰であった。でも、彼のような人が出てこなければ、改革をしようというような意欲も出なかったであろう。ここの国で改革を行うということすごくむずかしいということは覚えておくべきだ。ソ連体制というのは、現状を維持するのは非常に簡単なのだが、改革をするのには非常に難しい国であった。それはよく考えると当然である。なぜ難しいのかというと、一つは国の大半にとっての政治は傍観するもので、当事者として参加するものではなかったということ。そう

いう風に教え込まれていて、自分たちの意見を言うのは危険な状況であった。一握りの受益者が出した政策を、受け入れるしかなかったということ。二つは、二重にも三重にも検閲された情報の中で生きているので、自分の国家がどれほど深刻な問題を抱えているのかということをしらなかった。何も知らないと深刻には考えない。日本の年金もそうでしょう？国家というのは概して自分たちに都合の悪いことは伝えないものだが、ソ連はさらに上をいっていた。自分たちの国よりも周りの方が豊かだとか、自由だとかを教えるよりは、周りの国では失業があるとか、教育費がかかるとか、そういうーの情報しか教えなかった。なので、国民は自分の国がどういう状況なのかということがわからなかったのだ。もちろん意識の高い人は、映画とか見て、いろいろ見て憧れを感じるのだが、それが何を意味するのかということはわからなかった。この社会は、改革は社会全体が置かれた状況をぜんぶ把握していて、その情報網を持っていて、同時に改革を始めるといっても捕まらない人間しかこの改革を始めことはできなかった。

彼が最初に迎える問題は、中堅クラスから下等クラスまで含めて、周りがなぜ、どうして、どういう規模の改革を行わなければならないのか何も知らないという状況下で改革を始めなければならないということである。これにはとても複雑な問題がある。まずはトップに上がらなければならないので（そのためには上から引き立てられなければならないので）、最低限優秀でなければならない。しかも同時に体制が問題を抱えていて、改革をしなければならないということを意識する人間でなければならない。二重性を持った人間じゃなければならない。大衆的な人気を集めないような人だね。ちょっとうさんくさいような人ね。頭のよい、器用な人でなければならないということだ。上に上がるまでは、上に従いつつも心の中では改革の意志を抱き続けている、そういう意味で、二重性を備えた人でなければならない。まずは、民衆を説得する、啓蒙活動から始めなければならない。これはこの体制独特な特徴である。マスメディア政府から独立して入れしていれば、啓蒙活動はマスメディアがやってくれて、それに対してどう対処するかだけ、政治が機能すればよいのだが、ソ連はマスメディアがコントロールされているので、自分で啓蒙活動をしなければならない。彼ら国民は非常に平穏な生活を享受している。そんな人間たちに、大規模な企画を行わなければならないということを訴えなければならない。それで大規模な改革とは、経済改革、それは何を意味するかということ一つに受益層に関わる体制エリート、計画経済に関わっている人たち（ゴスプランの人たち）と戦わなければならないこと、二つに今までの経済の仕組み（指令→生産→分配）で動いていた経済が動かなくなってしまう可能性があるということ、を訴えなければならないということである。二つめは、今まで自分で計画していたものが、市場経済に任せるとのことなので、失業が起きるかもしれない、今まで国家が補助金を出してやすく提供していた物品の値段の高騰が起こるかもしれない、経済的な不平等を起こすかもしれない、つまり、エリートにとっての既得権益の喪失、国民にとっては経済システムの混乱を意味する。経済的不平等・失業を甘んじて受ける、ということをしている。そうしなければ改革はあり得ない、改革ってのはそういうものだ。よって、敵味方が生まれるのは当然のことであった。

ゴルバチョフは一番簡単な部門から改革を始めざるを得なかった。そこは計画経済の中で一番無視されていた部門、商業・サービス部門であった。商業部門は分配する最終的な末端機関だと考えられていたので、サービスなどは全くない機関であった。サービス業は発達せず、商業部門は計画経済の中では、富を増やしてはならない部門ということでほとんど無視されていた。その部門は何回も経済的なチャンスがあったのに、無視されてきた。その部門を中心に経済改革を行わざるを得なかった。既得権益を持っている人たち、エリートが監視しているようなところでは動けない、国民が不安を感じているところでは動けない。そういう中で、一番簡単だったのが商業とサービス部門であった。都市部では、例えば飲食店が開設されて、国营企業間のサービス豊かな食料品が提供されるように、「ちょっと高くてもよいものを買いたい」という人に向けてものを供給するようにする。国营企業間の物品調達をする、計画経済の持っていた接合部分を埋めるために資金・素材を調達する、一時的に金・物を貸す、そういう業界が発達していなかったもので、そこに目掛けて新しい仕事を作れるようにする。

「フリードマンは友人とともに協同組合（コーペラチフ）を設立した。コーペラチフとは小規模の私営事業に与えられた名称で、1987年にゴルバチョフが試験的に市場改革を容認した際に合法化された。・・・フリードマンの両親と友人はこの事態に身震いした。『ゴルバチョフによってもたらされた雪解けは、遠からず何らかの血なまぐさい弾圧行為が行なわれて終わりを迎えるに決まっている・・・』・・・フリードマンのような人たちは、半ば偶然に、また半ば本能的に危険を覚悟のうえで市場改革を信じてみたのである。創設したばかりの協同組合（コーペラチフ）で、後はありとあらゆることをやってみた。それは宅配業、共同住宅賃貸仲介業、シベリア産ウールを素材にしたショールの販売など多岐にわたり・・・」

これは私営事業だったので、自分たちでお金を持ち寄って、今までにの計画経済に足りない部分をやりますよという形でやっていた。しかし、それはこの社会では明らかに異質な行動であったから、いつそれが危険な行為になるのかわからない。でも、やってみると、実はいろんなところから需要がたくさんあって、でもそれをみんなが怖がってやってなかっただけだったということがわかった。そこでボロ儲けしてゆくということになる。今のロシアの富豪たちは、皆この時期の人である。この時期に、ゴルバチョフが市場経済を目指すと先読みして、それに目掛けて進んでいった人たちである。しかし、なかなか順調に改革が進まなかった。大衆が恐れていたからだ。失業がくるか

もしれない、経済的な不平等がくるかもしれない、日用品が手に入らなくなるかもしれないということを恐れている。一方で、エリートたちは、露骨に反対している。これを潰すためにはどうしたらいいか。そこで、啓蒙活動からさらに進んで、言論の自由を確保してエリートを追い詰めようとした。エリートを追い詰めるために、ジャーナリストに何を書いてもよいとして、大衆を喚起してデモも許可し、集会も許可した。勉強会を開いていかに官僚が無能であるかを勉強する。こういったことを黙認するようになる。明らかに自分の改革をさらに進めるためであった。ソビエトの選挙投票についても、昔は一人の候補者の承認選挙であったが、1989、3から複数の立候補者による普通選挙が行われるようになった。そうすると共産党の幹部が倒れるようになる。90年に自分が大統領になる。これがペレストロイカの大きな流れ。これは世界中で注目され、彼はノーベル平和賞もらう。

でも、ここで問題があるわけだ。国民はというと、社会は明らかに混乱していて、集会を開きながら様々な要求を出していて、また経済の不安を認識していて買い占めが起こっている。その結果として、お店にはものがなくなる。そんなときに、コーピラチフは何をしたかという、生産部門と販売部門を切り分けて、生産部門にある国営会社は毎年ゴスプランから資材がくる。その資材を使ってものを作ることができるので、ものは要求しただけくる。でも、作ったものは売れない。売ったことにしてお金は一にする。それで今度は国営企業で作ったのとは別のものを作って、自分たちで販売会社を作って売る。その売り出す段階で、集金その他のサービスをするのはコーピラチフ。その集金部門でもってごまかす。自分たちは外国に行つて口座を作ってそこにお金を集める。これは結構一般的に行われていたこと。生産部門はいつも国営にして、赤字企業にしておいて、販売部門では私企業にしてお金をどんどん自分たちのポケットにしてゆく。このコーピラチフという小さい規模の私企業は、トンネル会社になっていて、これを使って儲けることができるのは、外国によく出られる人間である。ゴルバチョフが作った制度改革によって、異常にお金儲けがしやすいような構造になったのは確か。そうすると社会は混乱し、計画経済が機能不全を起こし、貧富の差が生まれて拡大している・・・なのに、外国ではこれを民主化と呼んで、ゴルバチョフを褒め称えて、ノーベル平和賞をあげたわけ。

この落差は非常に重要。

では民主化とは何なのか。

・ ロバート＝ダールのポリアーキーに即してみれば、民主化がすすんだ

1. 政府の政策決定権は憲法に基づき選出された公職者に与えられる。
2. 公職者はひんぱんに行なわれる公正な選挙で任命され、排除される。
3. 実質的にすべての成人が選挙権を持つ。
4. ほぼすべての成人は、公職に立候補する権利を持つ。
5. 市民は表現の自由の権利を持つ。
6. 市民は情報へのアクセス権を持つ。
7. 市民は、政党や利益集団など政治集団を創る権利を有する。

これらは1から4は政治参加の流れでいう「選挙」。議会や国民によって選出された公職者が政策決定権を持つということ。1989—90年にかけてだいたい満たされる。3はソ連次代からある。5はさっき言ったとおり。6はほとんど認められていない。日本でも、情報を要求する請求権が認められたのはつい数年前です。7はソ連の憲法では共産主義建設を目的とする団体だけ設立が認められていた、それ以外は反ソビエト組織として団体が禁止されていた。大学の同窓会という組織さえ認められていなかった。でも、ゴルバチョフは、非公式団体を暗黙に了解するようになった。なので7は半分くらいは認められる。

つまり、国民の生活が悪化して、社会が混乱して、そのたびに国民の政治意識が高まって、普段街頭に人々が集まって出ているような状況で起こった事柄の大半は、ポリアーキーを作るための民主化に向かっているといってもよいのである。1986年からソ連では民主化が進展した。しかし、これは政治体制が機能しているということではない。改革によって体制は、政治参加が拡大（選挙において自分たちの意志を表明することが可能になっている）し、異議の申し立て（表現の自由によって団体を作って政治活動ができるようになっていく）ができるようになったということからみて、民主化しているということは確実である。でも、解決しなければならない社会問題や、経済問題が解決されたのかいこうそうではない。街頭で一方では人々がゴルバチョフを糾弾している、また一方では全く別の問題について話している。これを街頭民主主義という。街頭で人々が政治について議論している、それは一見するといいいことではないかと思うかもしれない。でも、裏からいえば社会が混乱している、政治体制が機能不全に陥っている可能性があるということがいえる。問題が起こっている問題を解決してゆく能力がないと、政治体制は機能しない。人々は解決してくれることを望んでいるわけで、毎日集会を開いて、言いたいことを言っていればいいのかというと、それはありえない。民主化というのは、当然古い政治体制の機能を麻痺して新しい政治体制を作る課程に起こるものであるから、その課程では古い政治体制は機能しなくなる。一方で、新しいものが必ずしも機能するとは限らないのだ。新しいものが、経済的不平等とか失業を生む可能性もあるし、本来旧体制なら簡単に解決できる問題も、できないかもしれない。

ゴルバチョフの権力がこの間に徐々に弱まっているということが起こっているのは、一部には民主化によって彼に集中している権限が奪われていったからである。選挙普通化によって人事権が奪われたりとか。市場を動かすことによって、ものの分配する権利の半分がだめになったりとか。でも問題なのは、民主化が行われれば古い体制が動かなくなって、新体制が動き出すまでに時間がかかるのであって、その間の混乱をどのように



収集するかについてどのような対策を施すのかということが用意されてなければならなかったのだが、ゴルバチョフはその点で準備不足であった。民主化というのは、政治体制そのものの目的ではないということは注意しなければならない。なぜ民主化しなければならないかという質問に答えるには、民主化をすれば将来的にはいいことがあるかもしれないが、短期的には問題が起こるということを覚悟しなさいと言うことになるので、非民主的酷かが民主化するということがいかに大変かということとは明らか。外にいる人間だけが、民主化はいいことだと考えて、ノーベル平和賞をあげようということになるわけ。

- ・ 二つの確認されるべきこと。1. 上からの改革による政治的民主化は、ソ連国民のどれほどの層に支持されていたのか、不明なままであった。ゴルバチョフの人気は高かったのか？ 2. 民主化しつつある体制は、いわゆる「街頭民主主義」をもたらしたが、それは政治が機能不全になりつつあったことを意味した（経済システムも、機能不全になりつつあった）。

上からの改革によって政治的民主化がなされたことは認める必要があるが、それはソ連国民がどれほど望んでいたことなのかはわからない。もっと冷たくいうと、外側から見ると、ゴルバチョフは人気が高かったに決まってると考えがちだが、実際は人気が高かったかわからないということ。

天安門事件では、街頭民主主義を体制が蹴散らしたが、これは機能し始めているのではなくて、旧体制が機能不全を起こしているという状況で起こっていたのであった。多少欠陥があっても、機能している政治体制に戻った方がはるかに国民にとっては望ましい。

国内ではゴルバチョフ人気はない。外と内のギャップ。唯一彼に足りなかったのは、大衆の中に入って、自分を選挙で選ばせるだけの度胸がなかったということである。彼が大統領になったときは、初代なので、人民代表会議によって選ばれたのであって直接選挙によって選ばれたのではなかった。

政治体制の機能ということをもう一度よく考えて、1945年の体制からどういう風に民主化されていったのかということをよく考えて欲しい。ポリアーキーとかは基本だから押さえてね。

貼り付け元 <<file:///I:/授業ノート2年生/現代ロシア論/現代ロシア論6・7.doc>>